

デューイとマルクス主義

稲葉 宏雄

1

西欧的自由主義の伝統に立つデューイの立場と、共産主義と云う政治的党派的な革命的实践に理論的指針を与えようとするマルクス主義が、政治的イデオロギーとしては和訳しえないにしても、理論の領域に於いて平和的共存が不可能であると前提するならば、それはプラグマティズムにも又マルクス主義にとつても喜ぶべきことではない。プラグマティズムが単に19世紀から20世紀にかけてのアメリカの所産であると云うだけで、それを経済的土台と関連づけ、アメリカ帝国主義の哲学、独占資本主義段階のブルジョア・イデオロギーとしてマルクス主義陣営が規定する時、それは余りにも党派的非科学的な独断に外ならず、何らの説得力をも持たぬであろう。哲学的には弁証法的唯物論がヘーゲル哲学の高次の発展形態である如く、プラグマティズム特にデューイの立場はヘーゲル哲学の一つの発展形態なのである。例えばレーニンが、「論理学は認識の学である。それは認識論である」⁽¹⁾ 或いは、「論理学、弁証法及び唯物論の認識論（三つの言葉はいらない、それは同じものだ）」⁽²⁾ と云う時、それと対応するかの如く、デューイの「論理学」は「探究の理論」として、探究過程に種々の論理的形式を位置づけ、それは「確信保証性」(warranted assertibility) と云う名称のもとに確定される知識獲得と云う認識論的立場をとっているのである。デューイにとつては論理学は認識の方法過程の分析に外ならなかつたのである。それはある意味でレーニンの意図したものと共通の要素をもっていると言えよう。

こうした理論の事実を事実として認めることは、マルクス主義の立場にとつて決して不名誉なことではないであろう。現代のマルクス主義に於

ける最大の欠点は、党派の立場を強調するの余り、他の一切の理論に対して余りにも非学問的な偏狭さを示すことにあるのではなからうか。かつてレーニンがプロレタリア文化のためにブルジョア文化の一切のよきものを学習しなければならぬとした態度は影を消したかの如くである。かかる学問的謙虚さの欠如の結果は、毛沢東が繰り返しいましめた教条主義・引用主義への転落に外ならない。理論と理論の相互批判に於いて、誤った教条主義と単なる経済的土台への還元主義は厳に排除されねばならぬ。この誤った方法は、現代のマルクス主義によるプラグマティズムと論理実証主義への批判に典型的に示されている。プラグマティズムはコーンフォース (M. Cornforth) やウェルズ (H. K. Wells) が云う如き主観的観念論、帝国主義の哲学につきるものではない。今こうした事実を認めつつ、所謂弁証法的唯物論の領域、特に認識と知識の問題に関してデューイとマルクス主義の立場に一つの考察を加えたいと思う。その原理的考察は、現在様々の意味で批判の対象となっている経験主義の学習方法としての問題解決学習の立場を今一度反省することになるであろう。

デューイは繰返し理論と実践、行動と知識の分裂に批判を加え、自らの実験的探究の立場に於いて両者の統一を結果しようと試みた。これと同様にマルクス主義も理論と実践、行動と知識を常に対象の正しい認識に於いて統合しようとした。両者は共に認識不可能な物自体を否定し、理論の真理性の唯一の基準を実践に求める点に於いて類似した点が認められるのである。その限りフッサールがデューイの「探究は客観的材料の客観的変形に関係している。」⁽³⁾ 「総ての統制された探究と根拠づけられた確言の総ての構成は、必然的に実践的要因即ち探究の問題を設定する所の先行的に存

にしている材料を再び形造ると云うなすことと作ることの活動を含んでいる。」⁽⁴⁾と云う言葉と、マルクスの、「(1)これまでの総ての唯物論の主要欠陥は、対象が、現実性が、感性が、唯客体或いは直観の形式のもとにのみ把握されていて、人間的・感性的な活動、実践としては把握されず、主体的には把握されずにいることである。これがために、この活動する側面は、唯物論からではなしに却つて反対に観念論の方から展開させられると云うようなことになった。(2)人間の思惟によつて対象の真理が得られるかどうかと云う問題は、何ら理論の問題ではなく、一つの実践的な問題である。実践に於いて人間は真理を、換言すれば自分の思惟の現実性と力を、即ち自分の思惟の此岸性を立証しなければならない。(3)哲学者は世界を唯、色々に解釈しただけである。しかし大事なことはそれを変革することである。」⁽⁵⁾と云う文章を引用しつつ、「語法のある差異を許すならばマルクスの教説は本質的に器具主義から識別されえない。」⁽⁶⁾と指摘する時、それは全く正しいと云わねばならぬ。けだしマルクス主義が実践から出発して実践へ帰り、理論は実践の指針であつた如く、デューイの実験主義にあつても理論は行動の指導としての機能を果すのである。知識は単に観想的受動的に対象を受容するのではなくて、対象についての観念、知識の正しさを確証するためには、それは実践を通じて対象に適用され、対象に一定の意図的な変容を惹起するのでなければならぬ。理論は行動に導き、その行動が対象に一定の意図された結果を生ずることによつて、理論の知識としての妥当性が確定される。問題を認識論的方法過程に限定する時、我々は毛沢東の「実践論」とデューイの「探究の理論」の間に、或る方法的類似性を見出しうるのである。その限り、「マルクスとデューイの基本的な論理学的形而上学的立場は同じである。」⁽⁷⁾と云うフック(S. Hook)の提言は意味深きものを持つと云うことが出来る。

他方マルクス主義的立場からのマルクスとデューイの理論的相違はどのように見られているであろうか。ラッセルやフックの言葉は単に観念論者

の間の妄語としてしかく容易に却けられうるものなのであるか。ともあれ現代のマルクス主義的哲学者ハワード・セルサム(H. Selsam)のプラグマティズムとマルクス主義の哲学的立場を図式化した次の文章を引用しておこう。「科学的唯物論的世界観に対立するものとしてのプラグマティズムの主要な特徴は何であるか。それは次の如くである。(1)何らかの又総ての人間経験から独立して存在しており、且つ我々の感覚の媒介によつて精神に反映される客観的实在の否定。(2)何らかの客観的必然性、因果性、所与のかくかくの事件と過程は、他の何物かに必然的に従うと云う教示の必然的な否定。(3)何らかの客観的知識又は客観的真理の否定、従つて自然的現象と社会的現象の予見又は統制についての現実的可能性の否定、(4)所与の目標・目的・意図の成功的成就が何らかの観念又は原理の妥当性の唯一のテストであり、それらの真理性の唯一の意味を構成する。マルクス主義者の科学的唯物論はプラグマティズムのこれらの基礎的教示についての直接的対立を主張する。弁証法的唯物論は次のように教える。(1)存在している所の客観的物質的实在があり、この实在は我々の感覚を通じて我々に与えられる。(2)この实在は一つの構造とその発展の法則性を持ち、従つて所与の特殊な出来事は他の何物かに必然的に従属する。(3)我々の感覚と理性を通じて我々は实在についての現実的知識、絶対的真理に対する接近を成就し、この知識を通じて我々は自然と社会的関係の絶えず拡大して行く領域を予見し統制することが出来る。(4)我々の観念の真理性のテストは実践に於いてのみ見出されるけれども、観念は結局それが真理である限りに於いてのみ作用するのであつて、プラグマティストが主張するようにそれが作用するが故に真理であると云うのではない。」⁽⁸⁾

このセルサムの図式化はデューイに対して多くのマルクス主義者が一貫してとる立場である。

(例えば、Wells : Pragmatism 1954. Cornforth : In Defence of philosophy against positivism and pragmatism. 1950. Science versus Idealism : in defence of philosophy against positivism and pragmatism,

1954. Schewkin : Die Pädagogik J. Deweys 1955) ここで(2)(3)(4)の提言についてはある妥当性が認められるにしても、(1)のデューイに於ける客観的实在の否定と云う提言だけは少くとも問題であると云わねばならぬ。それはデューイの自然主義の問題につながるからであり、彼の立場は客観的实在を否定する単なる主観的観念論ではありえず、又何らかの意味で客観的实在を認めなければ自然主義も実験的経験論の立場も崩壊し去るからである。

2

マルクス主義はセルサムも指摘しているように客観的实在としての物質から出発する。この客観的实在としての運動している物質の種々異なる側面が宇宙の現象を構成し、物質は人間の精神全体の外部に存在していてその存在のためには如何なる精神・意識をも必要としないのである。「物質の唯一の性質は客観的实在であると言う性質、即ち我々の意識の外に存在すると云う性質である。」⁽⁹⁾ 従って物質と人間の精神・意識とに於いては物質が第一次の根源的であり、意識・精神は第二次的派生的であつて、それは物質の高度の発展形態として物質の法則的運動を反映するものにすぎない。精神は人間にとって先天的形式ではなく物質発展の頂点に立つものに外ならぬ。「感覚は脳・神経・網膜等々に即ち特定の仕方では組織された物質に依存している。物質の存在は感覚に依存していない。物質は第一次的なものである。感覚・思考・意識は特殊な仕方では組織された物質の最高の所産である。」⁽¹⁰⁾ 自然の過程に於いて人間の意識・精神にまで発展した物質は物質を客体化しそれを対象化することが出来るようになる。即ち人間は自然の物質的運動を反映し認識する主体に転化するのである。かくて人間は先ず感覚を通じて客観的实在としての物質に関係し、それを反映し、意識は更に深く対象としての物質、自然の法則性を反映するのであり、実践はその反映の検証である。この客観的实在としての対象の反映がマルクス主義の認識論である。従って、「世界は物質の合法則的運動である。そして自然の最高の産物である我々の認識は唯この合法則性を反映することが出来

るだけである。」⁽¹¹⁾ と云う立場が必然的に成立する。そこでは自然の弁証法的発展法則は思惟の論理的法則と相互に一致しうるものなのである。云わばこの立場は、反映されるもの（物質的客体）は反映するもの（意識）から独立に存在しうるが、反映するもの（意識）は反映されるもの（物質的客体）から独立に存在しえないと云う原理から出発している。それは人間が客観的实在に依存しているのであつてその逆ではないと云うことであり、マルクス主義がプラグマティズムを客観的实在の否定として批判する時、プラグマティズムは客観的实在を却つて人間に依存せしめていることを意味する。典型的には「存在するものは知覚されるものである」と云うパークレーの立場をプラグマティズムはとつていると云うのである。それは妥当な批判であるのか。

デューイは不確実な経験的世界に生きている人間が究極的に確実な安全と価値の源泉を求めた超越的实在の世界を否定した。伝統的古典的哲学は一方では真理の最後の源泉と是認が確証され、絶対的で最高の実在性を保証しうる超自然的世界を想定し、他方に於いては日常の實際的事象と人間の効用が関係している経験的で相対的に実在的な現象的世界を対置した。そして、「哲学はそれ自身に対して、超越的・絶対的或いは内的实在の証明とこの究極的で高次の实在の性質と特徴を人間に対して啓示する役割を偽つて自分のものにしたのである。」⁽¹²⁾ それは人間の経験的な実践の世界が常に危険と不確実性に伴われているので、人間がその危険に伴われない絶対的に確実なものを知識に於いて求めようとする傾向を結果したのであつた。この理由のために人間は知識の対象としての永遠で不変な究極的实在の世界を見出そうとしたのである。即ち究極的实在の世界を開示することが知識活動の唯一の目的であり、又こうした知識を確保することのみが確実性に到達する唯一の方法と考えられたのである。けれど、「知識の役割は、我々の実践的判断の場合のように問題が生じて来る時それを扱うのに必要である所の理解を獲得することよりもむしろ先行的实在を開示することである。」⁽¹³⁾ とされ、更に「安定性は

知識の確実性によつて測定され、一方知識の確実性は固定的で不変な対象に対する帰依によつて測定される。」⁽¹⁴⁾と云うことになった。デューイが攻撃の矢を向けるのはこの二元論に対してであり、人間の実践的活動から超越して実践によつて何らの変容も受けず唯それを観想的に把握することによつて人間に確実性を保証すると云う超越的實在に対してであつた。ここに哲学が改造されねばならぬ必然的要請があり、それを彼は「究極的絶対的實在を扱うことの何らかの不毛の独占を放棄する哲学は、人類を動かす道德的力を啓蒙することに於いて又秩序づけられた知性的な幸福に達しようとする人々の熱望に寄与することに於いて補償を見出すであろう。」⁽¹⁵⁾と云う方向に於いて成就しようとした。その結果超越的實在の世界に確実性を探究する幻想的方途は放棄され、むしろ現実の経験の世界に於いて実践的生活の危険を事実として認め、その危険を、我々により大きな実践的統制を効果的に与える知識を獲得することによつて極小化して行く方法が求められたのである。従つて、「確実性に対する探究は統制の方法に対する探究となるのである。」⁽¹⁶⁾かつて知識が保有すると考えられた確実性は、観念論の哲学者によつて想像された絶対的確定性ではなくて実践的確定性なのであり、それは実験的方法即ち探究によつて獲得されるのである。マルクス主義がカント的な物自体の世界の認識可能性を主張することによつて超越的な形而上学的世界を否定した如くに、デューイは実験的探究の方法による確定性の追求と云う立場から究極的實在の世界を否定した。しかしそれは決して人間がそこに於いて存在し経験がそこに於いて成立する自然的實在の世界を放棄し、人間の意識のみが対象的世界を構成すると云う主観的観念論に転落したことを意味するものではない。

しかるにウェルズは次のように批判する。「超自然的な先行的實在に対するデューイの攻撃は總ての先行的存在に対する一般的攻撃に拡大される。この攻撃から、實在的であることは知られることであり或いは實在的であることは活動の主体であることであるとデューイは主張する。これは「存

在するものは知覚されるものである」と云うパークレーのパラクレーズに過ぎない。何らかのそうした定義は實在を人間の経験に依存せしめる。そうした人間への依存は、人々が世界の中心であり又一層具体的には世界の創造者であるとする主観的観念論の一形式である。世界は私の観念、私の活動、私の経験である。」⁽¹⁷⁾更にデューイの自然主義については次のように云う。「人間は離れ難く自然と結びつけられ自然は人間と結びつけられている。関連は非常に密接であるので自然は人間の経験と同一である。経験は非常に深く自然に滲透しているので自然は全く独立的存在性をもたない。この仕方デューイは客観的實在を否定する。……彼はこの教示を「自然と経験の連続」とよんでいる。連続性は非常に連続的であるので二つは識別されえない。自然は経験されるものである。事物は事物の経験である。事物は事物に対する人間の反作用である。」⁽¹⁸⁾この主張に従えば自然は自然自体として存在するのではなく、人間の存在によつて即ち人間の経験によつて存在することになる。まさに存在するものは知覚されるものなのである。しかしこの際、人間と自然の連続性に於いてどちらが根源的であるかと云うマルクス主義の物質と意識との関連にも似た問題が除外されている。デューイは躊躇することなく自然がより根源的であり、人間それ自身が自然的なものであることを主張するであろう。知性的思考をその機能とする人間は自然の発展過程そのものに於いて自然から派生せらるのであり、それは自然の一部として自然を対象化し、その変化のコースを統制しうる主体に転化するのである。即ち人間の意識とはそれ自身の意識をもつ自然であるからである。「人間の知性的活動は外部から自然に関係づけるためにもたらされた或るものではない。それは事件のより十分により豊富な結果のためにそれ自身の潜在力を実現しつつある自然である。」⁽¹⁹⁾従つて自然的世界は人間の経験に依存することなくそれ自体に於いて存在しうるのである。「観念論には失礼であるが我々は思考から存在を引き出すことは出来ない。」⁽²⁰⁾とデュー

イは主張する。このように彼にあつては自然が第一次的に存在しなければ人間自身が存在しえないのであり、ブランメルト (T. Brameld) はこうしたデューイの实在観を明白に定義づけている。「経験的存在論はプラグマティズムの見解にとって必須であるけれども、それが人間の観察、判断、統制の範囲内に入る時にのみ全く意味深きものとなると云うことを我々は指摘すべきである。これはある古典的哲学者と共に、人間は文字通りに彼の環境の世界に於いて彼の知覚する能力によつて対象を創造すると云うことに決して同意するものではない。自然は *homo sapiens* と云う種が進化的スケールに於いて出現した以前の世界の時代に於いても存在していた。自然の諸部分はなお天上遠くの領域に存在している。」⁽²¹⁾ 更にデューイが、「探究の何らかの現実的手続きに際して我々は世界の存在を疑問としないし、又我々は自己矛盾なしにはそのようなことをなすことは出来ない。」⁽²²⁾ と云う時、彼の立場を主観的観念論と批判することは誤解と云わねばならぬ。それ故にこの立場をマルクス主義の客観的实在としての物質との関係に於いて考察した コーク (J. Cork) の次の言葉は適切である。「マルクスとデューイは哲学思想に於いて唯物論的伝統に属している。もつともデューイは唯物論と云う言葉の使用に対して好んで自然主義と云う言葉を使用するのであるが。……デューイは外的世界の存在の实在性と物理的 (非有機的) な物質と事件からの生活と精神の出現を受け入れている。」⁽²³⁾ 以上の諸点を考慮するならば、それはエンゲルスの、「人間そのものが自然の一産物として自分の環境の中で環境と共に発展して来たものである。」⁽²⁴⁾ と云う言葉とどれ程相違があるであろうか。

ともあれデューイにとつて实在としての自然に人間が関係する道は経験である。人間そのものが自然の一部分である以上、経験は対象と人間をも含めた有機体が相互作用する際に自然が仮定する形式となるのである。この経験過程にあつて人間は自然を再構成し、再構成することによつて自然を人間の目的と関心に一層奉仕せしめるのである。即ち、「経験は人間を自然から遮るヴェール

ではない。それは自然の核心へ連続的に更に滲透する手段である。」⁽²⁵⁾ かくて経験とは、自然の一部としての人間が他の自然的存在との間に行う相互作用としての行動過程を意味する。経験にとつては行動の主体としての人間と、それが働きかける対象としての環境的事物が不可欠の要素であり、人間と客観的对象によつて経験は構成される。経験的对象は経験の結果によつて産出されるのではなく、経験的相互作用の関係が設定される以前に客観的に存在していたのみ経験を構成する要因たりうるのである。経験はデューイによつて繰返し云われる如く、*doing and undergoing* の過程として、一方では環境に変化を惹起すべく行動的に何事かを試みることであり、他方ではその行動の結果対象に生じた変化を蒙ることである。*doing and undergoing* の相互作用の連続的過程が経験であり、そこでは能動と受動の密接な関係がある。

しかしこの際、対象は単に観想され、享受され、受容さるべき表象ではなく、人間に対決をせまり、問題を孕み、思考を誘発してのみそれを解決しようとする緊迫感をもつてせまってくる實在的对象なのである。云わば経験の世界は問題が決定されていない未決定の要素、即ち問題的要素を含んだ危険な世界なのである。そしてこのような問題的状態のうちに於いてその問題を解決しようと試みるのが思考することであり、それが同時に探究の方法であつて、その探究を方法的に行う力がデューイの云う知性なのである。実験的探究はかかる問題の操作的解決を通じて知識を構成すると云える。「実験的知識活動に於いては、先行的存在は常にその起原を自然的原因にもつ所の或る経験の材料である。しかしその材料はその生起に於いて統制されなかつたので不確実で問題的である。」⁽²⁶⁾ とデューイは云っている。探究はその問題的な材料を思考に対する挑戦として扱うのであり、知識の対象としてではなくむしろ知られるべきものとして扱うのである。そして、「知ることにおける第一歩は、解決を要求している問題を位置づけることである。」⁽²⁷⁾ かくて問題は知

識のための探究の方法の構造に展開する。

3

デューイは探究の方法の性格を次のように特徴づけている。「実験的探究は三つの顕著な性格を示している。第一は、総ての実験が具体的行動即ち環境に於いて或いは環境に対する我々の関係に於いて、明確な変化を作り出すことを含んでいると云う明白な特性である。第二は、実験は気まぐれな活動ではなくて、活動的探究を惹起する問題の要求によつて提示された条件に合致しなければならない観念によつて指導されていると云うことである。第三の結論的な特徴は一これに於いて他の二つのものの意味が十分に測定されるのであるが一指導された活動の結果が、そこに於いて対象が異つて相互に関係し合うような新しい経験の場を構成すると云うことであり、指導された操作の結果が知られると云う特性をもつ対象を形成することである。」⁽²³⁾ 従つて知識の対象は探究を惹起する問題が操作的に解決された結果として成立するのであつて、操作的行動を媒介とせず認識の実験に先行的な実在を直観的に把握することによつて成立するのではない。そこでは知ることとはなすこと即ち行動の結果なのであり、理論は実践を導く観念の構成と云うことに於いて実践と結合せしめられる。

かかる実験的探究は、感性的感覚的要因にかかわる操作と合理的観念的要因にかかわる操作の二つの操作的行動に分化している。前者は問題の本質の何であるかを規定するための分析的な観察操作であり、それは問題の確実な事実的与件、即ち理論の説明が考慮しなければならない証拠を発見するために行われるのである。後者は観察された素材を解釈し、更に新しい観察の実験の創始を示唆するために使用しうる観念を事実的与件から暗示として受け取り、それと共に他方ではその観念を問題解決に一層適切ならしめるために既得の知識との関係によつて推蔽するのである。この実験的操作によつて新しい与件が得られ、この与件が提供する附加的証拠が新しい観念と更に多くの実験を示唆し、遂に問題解決に導くような究極的仮説が構成され、それに従つて実験的行動が展開さ

れて、問題の状況の存在的変革を通じて問題が解決されるに至るのである。そして探究の結果が知識として確定されて来る。「知識は問題の場を解決された場へ転換せしめる試みの結果である。」

⁽²⁹⁾ 或いは、「満足に探究を終了せしめるものは定義によつて知識である。それは探究の適当な終末であるが故に知識なのである。」⁽³⁰⁾ の如く、知識は実験的探究の所産としてより以外には成立しえないと云うことが出来る。

以上のような実験的な操作的探究の立場から、合理主義も経験主義も共に誤りを冒しているとデューイは云う。合理主義は普遍的性格をもつた究極的原理が直接的な知識の対象であり、理性はその把握器官であると主張する。一方経験主義は直接的に知られる事物は感覚的性質又は感覚的与件であり、それを知る感覚-知覚が知識の唯一の器官であると主張する。これらは共に知識確立のために感覚或いは理性を一方的に強調することによつて、それらを知識確立の方法としての探究の中に正しく位置づけていない。実験的经验論からすれば、感覚的知覚と理性的概念は相互の操作的連関に於いて探究過程を構成するのであつて、それらは知識確立のために排他的であるのではなくて協力的なのである。即ち前者は観察に関係するものとして問題を位置づけ叙述し、後者は仮説的観念の構成として解決の可能的方法を表現する。かくて感覚と概念の区別は探究過程内部で生起し、それらは公然と遂行される実験的操作によつて関係づけられている。「感覚的要因と合理的要因は第一次的地位のための競争者であることを止める。それらは知識を可能にするために協力する同盟者である。」⁽³¹⁾ とデューイは主張する。

感覚的要因と合理的要因とを実験的探究の操作過程の中に含みもつデューイの探究の理論の特質は、実践的な問題解決を通じての知識の対象の確定に際して、場の存在的変形に至ることである。それは自然と社会の変革・再構成である。「探究は存在的変形と探究が扱う材料の再構成を結果する。変形の結果は一それが根拠づけられる場合には一不確定的問題の場の確定的な解決された場への転換である。」⁽³²⁾ 探究によつて確定された場、

即ちその結果の言語的表現がデューイにとって判断であり、「判断は探究の解決された結果として同一化されるのである。」⁽³³⁾ この判断形式をデューイは他方「確言保証性」の名の下に知識として扱い、知識体系はこうした判断の総合的構成として成立するのである。云わば探究操作を媒介とすることによって、知られるべきであつた不確定的問題の対象は確定的な知識の対象に転化するのである。以上のデューイの立場を彼自身の言葉によつて要約しよう。「我々が経験するがままの世界が実在的世界である。しかしそれはその第一次的局面に於いて、知られた世界、理解され知的に首尾一貫した安定している世界ではない。知識活動は経験された対象に一つの形式を与える操作から成立している。その形式に於いて、出来事の前進するコースが依存している諸関係が安全に経験されるのである。それは実在の過渡的な再指導と再編成を現わしている。知識活動は媒介的であり器具的である。それは存在についての比較的に不安定な偶然的な経験と相対的に解決され限定された経験の間にやつて来る。認識者は存在の世界の内部にいる。実験的なものとしての彼の知識活動は一つの存在と他の存在との相互作用を現わしている。しかしながらこの知識活動と他の存在的な相互作用の間には最も重要な差異がある。差異は自然自身の一部として自然の内部で進行しているあるものと自然の外部で行われている他のあるものとの間にあるのではなく、変化の規制されたコースと統制されないコースの間の差異である。……知られた対象は、それが意図的に再編成され再処理されるものとしての先行的对象であり、その価値がそれがもたらす再構成によつて検証される終局的対象でもある。知られた対象は、云わば精選された金属が天然の金属に対してなされた操作から出て来る如く実験的思考の苦難から現われる。知られた対象は同一の対象であるがある差異をもつた同一の対象である。」⁽³⁴⁾

以上のデューイの探究の理論に対してマルクス主義の認識論は如何なるものであるか。ここではレーニンの「唯物論と経験批判論」、「哲学ノート」以来のマルクス主義的認識論の優れた発展で

あると評価される毛沢東の「実践論」に従つて考察してみよう。デューイの探究は問題の場の対象との相互作用的な経験から始つた。それと同様に毛沢東は、「総ての眞の知識は直接的経験から来るものである。」⁽³⁵⁾ と云う。これは認識に於ける感性的段階であり、そこでは人間は客観的な外界と肉体的感覚を通じて実践的に作用し合っている。これによつて人間は事物の現象、事物の個々の一面についての印象を多数に集め、その印象の間に概略的な関連づけを行うのである。この段階では、人間はまだ深い概念を作り上げて論理的に整合的な結論を引き出すことは出来ない。しかし、「社会的実践の継続によつて、人間は感覚し印象したものを、実践の中で幾度となく繰返す。そこで人間の頭脳の中に認識過程での一つの突然の変化が起り、概念が生れる。所がこの概念そのものはもはや事物の現象ではなく、事物の個々の一面ではなく、それらの事物の外部的な連がりではなく、事物の本質、事物の全体、事物の内部的な連がりを捉えたものである。概念と感覚とは、単に量の上での違いをもっているばかりではなく、質の上での違いをもっているのである。」⁽³⁶⁾ これが認識の理性的段階であり、感性的段階と理性的段階を統一するものはやはり実践である。即ち実践によつて認識行動が始まり、その初期では実践は云わば現象についての外面的印象を認識主体に与えるにすぎなかつたが、認識自体の弁証法的発展が新しい質的に異つた段階としての理性的段階を現出せしめるのである。かくの如く、「認識の眞の任務は、感覚を通じて思惟に到達し、次第に客観的な事物の内部的な諸矛盾の理解、その法則性の理解、一つの過程と他の過程との間に於ける内部的な連がりの理解に到達すること、つまり論理的認識に到達することである。」⁽³⁷⁾ 認識の理性的段階に於いて、認識は論理的思惟の作用を通じて事物の現象から本質の理解へと深化し、感覚された材料を総合、整理、改造し、概念及び理論の体系を作り上げるのである。しかしその場合、感覚された材料が十分豊富で又実際に合致している際にのみ、それらの材料を基礎として正しい概念や論理を構成することが出来るの

は云う迄もない。このようにして認識は事物の全体、本質を反映し、その内部的法則を反映することが出来、遂には総体としての世界をあらゆる面で内部的発展の相に於いて把握することが出来るようになる。認識は客観的法則とその構造を、時代の歴史的制約の下で完全にはなくて近似的に反映するのである。しかし理性的認識に於いて認識はその全行過の半ばに達したにすぎない。

「マルクス主義の哲学が最も重要と考える問題は、客観的世界の法則性を理解することによって世界を説明することが出来る点にあるのではなくて、その客観的法則性の認識を適用することによって能動的に世界を改造する点にある。……マルクス主義が理論を重要視するのは、まさにそれが行動を指導しうるがためであり、そして又そのためにこそ重視するのである。」⁽³⁹⁾ 従つて、「認識は実践に始まり、実践を通じて理論的認識に達し、更に再び実践へ帰つて行かねばならない。認識の能動的働きは、感性的認識から理性的認識へ能動的に飛躍する点に現われるばかりでなく、もっと大切なことには、更に理性的認識から革命の実践へ飛躍する点に現われなければならない。」

⁽³⁹⁾ 理論が客観的真理に合致するかどうかと云う問題は、感性から理性へと云う認識運動の中では未だ完全に解決されていない問題であり、又完全に解決されることの出来ないものである。この問題を完全に解決する唯一の道は、理性的認識を実践の中にもち帰り、理論を実践に応用することによって予想していた目的を達成することが出来るかどうかを検証することである。即ち実践によって世界を変革することである。けだし真理の源泉としての自然と社会の発展法則は、客観的対象の中に、認識操作に先行的に存在している。認識はこの法則性を出来る限り正確に反映することである。この法則を反映しない限り、対象を意図的に使用して一定の目的を成就することは出来ない。そして自己の認識が、真理としてのこの法則を反映しているかどうかは、理性的な認識内容を客観過程に実践的に適用することによって検証されなければならない。予想した結果が創出される時、自己の認識は客観的法則に合致していたのであ

り、客観過程についてのその論理的認識は真理として受け入れられるのである。もし意図した結果が現実成就されない時、認識は客観的法則を反映していなかつたのであり、それは真理として受け入れられることは出来ない。実践こそが認識の真理性を規定する基準なのである。実践に始つた認識は、感性的認識、理性的認識を通じて再び実践へ帰り、こうした循環を繰返しながら人間の認識と知識はその深まりを増すのである。このマルクス主義の認識過程を毛沢東は次の如く要約している。「実践を通じて真理を発見すること、又実践を通じて真理の正しさを立証し、真理を發展させること、感性的認識から能動的に理性的認識へ發展させて行くこと、又理性的認識に基いて、能動的に革命の実践を指導して主観的な世界と客観的な世界とを改造すること、実践、認識、再実践、再認識と云う形で、この循環往復を無窮に繰返して行くこと、そして実践と認識が循環する毎に、その内容が一段と高度のものへ進んで行くこと。これがつまり弁証法的唯物論の認識論の全部であり、それがつまり弁証法的唯物論の知識と行動との統一についての見地である。」⁽⁴⁰⁾

以上のような毛沢東による認識理論は、感性的要因と理性的要因をそれぞれ認識の感性的段階、理性的段階に位置づけ、世界を変革する実践を認識の不可欠の要素としている。それはデューイの探究の理論が、感覚と概念を探究の全体の中に位置づけ、両者を知識獲得の同盟者とし、問題的境位の再構成を結果する実践的操作を知識確定の必須の条件としているのと或る意味では類比的である。しかし客観的实在の反映と問題の操作的解決と云う両者の認識の性質に関しては、著しい差異があると云わねばならない。それは知識・真理の基準ではなくて性質の問題である。

4

以上の如くデューイの探究の理論とマルクス主義の客観的实在の反映としての認識論に、共通して見られる特色は、著しい実践的性格である。知識への志向に於いて、デューイが場の存在的変形・再構成に至らねばならぬとして、「認識することとはそれ自身実践的活動の一様式であり、それに

よつて、他の自然的な相互作用が指導に対して従属するようになる如き相互作用の仕方である。」⁽⁴¹⁾と云う時、レーニンは、「人間及び人類の実践は、認識の客観性の検証であり、認識の基準である。」⁽⁴²⁾と云うのである。両者の立場にあつては知識確立の認識過程は、実践から理論へそして又実践へと云う理論と実践の統一的な弁証法的構造をもち、その無限の連続過程を通じてより高次の知識が形成されて行くのである。知識は実践の媒介なしには成立しそない。

従つてデューイが批判したのは、「その十分に妥当な意味に於いて、知識は不変で固定したものについてののみ可能である。」⁽⁴³⁾と云う立場についてであり、「知識は、その先行的状态を変容する何事もなせずに実在を把握し観想することであると云う教義—即ち実践的活動からの知識の分離の源泉である教義。」⁽⁴⁴⁾なのである。こうした立場から彼は次のように結論したのである。「知識活動は外的な傍観者の活動ではなくて、自然的社会的状況の内部に於ける実践者の活動であることを我々が理解するならば、知識の真の対象は指導された活動の結果の中にあることになる。」⁽⁴⁵⁾知識は探究の所産である限り知識なのであり、それは経験が実践の意味に於いて妥当性を保証するものなのである。知識の本質的性格を構成するのはこの実践的妥当性なのであつて、思考と思考に反映された客観的実在との一致ではない。この点、マルクス主義が実践的妥当性はそれ自身思考と実在の一致の結果であり、思考と実在との一致は実践に於ける妥当性によつて検証されると主張するのは異つてゐる。即ち、「知られた対象は、指導された操作の結果として存在するのであつて、思考又は観察とある先行的なものとの一致の故ではない。」⁽⁴⁶⁾これを更に進めれば次のようになる。「ある操作の結果は、もしそれが良好であるならば、即ちもしそれが探究を導いた条件を満足させるならば—他の結果と同様に良好で真実な知識の対象であろう。何故なら、もし結果が知識の対象であるならば、原型的な先行の実在は、それに対して探究の結論が一致しなければならぬ範型ではなくなるからである。」⁽⁴⁷⁾この文章を

引用することによつて、マルクス主義者はデューイが主観的観念論に陥入つたかの如くに批判する。(例えばゴーンフォース)、しかしここでデューイが云つてゐるのは、知識の対象の性格即ち先行的実在の対象が、知識の対象となる過程についてであつて、実在の対象の否定についてではない。経験的相互作用にあつては、主体と対立する認識されるべき対象は既に前提されておゐり、それは実験的探究の初期の段階に於いて不確定的問題なのであつて、デューイの云う「知識の対象」ではなかつたのである。その対象はそれ自身が喚起する実験的探究操作を媒介とすることによつて、確定的な認識された対象に転化するものであり、この転化した対象をデューイは知識の対象とよんでいるにすぎない。それは無から創造されるのではなく、不確定なものの確定化である。従つてデューイの場合、知識の対象とは探究操作が完了した後の結果に対する名称であり、それは探究の開始される前の知られるべき又認識されるべき対象が、人間の統制下に置かれることを意味してゐるのである。知識の対象を知られるべき問題的不確定的対象と混同してはならない。けだし、「知識の対象は終局的である。即ち知識の対象は知ることの活動の前に十分に存在してゐるものではなくて、指導された実験的操作の結果なのである。」⁽⁴⁸⁾

他方マルクス主義に於ける認識は、実験的な問題解決を必須の条件としたデューイの立場に対し、客観的実在の実践的反映と云う立場がとられる。レーニンは云つてゐる。「生きた直観から抽象的思惟へ、そしてそこから実践へ—これが、真理の認識の、客観的実在性の認識の弁証法的道程である。」⁽⁴⁹⁾「我々の外に物が存在する、我々の知覚や観念はその像である。これらの像の検証、真なる像の誤つた像からの区別は、実践によつて与えられる。」⁽⁵⁰⁾マルクス主義の認識、真理の性質の問題は客観的真理の存在と反映の問題である。客観的実在を反映することは客観的真理を反映することであり、真理とは反映された客観的実在であるからである。例えばレーニンは次のように云う。「我々の感覚を外界の像と見なすこと—客観的真理を認めること—唯物論的認識論の

観点に立つこと—これは同一のことである。」⁽⁵¹⁾ それは、人間の観念の中にあつて、主観に依存せず、人間にも人類にも依存しないような内容としての客観的真理を認めることである。それは人間の意識から独立した客観的實在としての物質の合法則的發展性を認めることである。認識とはこの物質の運動法則を反映することに外ならない。感覚から抽象的思惟へ即ち認識が感性的段階から理性的段階へ進むにつれて、外界の反映は現象から本質へと深化するのであり、実践はこの反映の正しさを検証するものなのである。即ち、「認識は人間による自然の反映である。しかしそれは単純な直接的な全体的な反映ではなく、一連の抽象や定式化の過程、概念や法則等々の形成の過程であり、そしてこれらの概念や法則等々は永久に運動し発展し行く自然の普遍的法則性を、条件的に近似的に把握するのである。」⁽⁵²⁾

事実人間がある時期に於いて、自然の客観的な普遍的法則を全体的に反映するならば、人間は絶対的真理を把握したことになるであろう。しかしこのことは、その時代の歴史的條件—科学、技術の発展段階—と自然自体が無限の発展過程にあると云う二つの制約によつて、常に相対的に止らざるをえない。それ故に認識の過程は無限であり、一定の時期での知識の不完全さ、相対性を、マルクス主義は科学の不断の発展、絶対的真理への一層の接近の指標と見なすのである。それは知識の相対観に止るものではないのである。「現代の唯物論即ちマルクス主義の観点から見れば、客観的絶対的真理への我々の接近の限界は、歴史的に条件づけられている。しかしこの真理の存在は無条件的であり、我々がそれに接近することは無条件的である。……あらゆる科学的イデオロギーには客観的真理、絶対的真理が照応していると云うことは無条件的である。……マルクスとエンゲルスの唯物論的弁証法は、無条件に自らのうちに相対主義を含んでいる、しかしそれに還元されることではない。即ち我々の総ての知識の相対性を、客観的真理の否定と云う意味ではなく、この真理への我々の知識の接近の限界が歴史的に条件づけられていると云う意味で認めるのである」⁽⁵³⁾ マルク

ス主義にあつては真理の根は既に客観的實在の中にあり、認識はその真理の反映であつて、そこに知識が構成される。そして反映の程度は歴史的に制約されているにしても、客観的真理の存在自体は無条件的であり、この真理への接近は、歴史に制約された知識としての相対的真理の総和として肯定される。即ち、「人間の思惟は、その本性上、相対的真理の総和から構成される絶対的真理を我々に与えることが出来るし又与えている。科学の発展に於ける各々の段階は絶対的真理と云うこの総和に新しい粒をつけ加える。」⁽⁵⁴⁾ とレーニンは云つている。従つて人間の行為が意図した結果を生み出しうるのは、その行為を導く知識が近似的に即ち相対的に客観的真理を反映しているからである。繰返される科学的実践はこの真理への近似度をますます狭め、絶対的真理への限りなき接近をもたらす。相対的真理は絶対的真理の一段階—契機である。

これに対して自然を無限の相互作用的変化の過程として、その変化の過程に法則性を認めないデュロイにとつて、客観的絶対的真理が容認されないのは当然である。真理の根が既に対象の世界にあることを彼は否定する。知識の真理としての性格も、常に変化を統制し問題を解決する探究操作の主体としての人間の媒介によつてのみ構成される。即ち、「我々を真に導くものが真である。こうした指導のために証明された能力が真理によつて意味されているものである。『真に』と云う副詞は、『真な』と云う形容詞或いは真理と云う名詞よりも一層基本的である。副詞は活動することの仕方、様式を表現している。観念又は概念は、特殊な状況の明瞭化に達する仕方として、ある仕方では活動すべき要求、命令又は計画である。要求、主張又は計画が実行されると、それは我々を真にか或いは偽にか導く、それは我々を目的に導くか又は導かないかである。その活動的力動的機能が観念について最も重要なことであり、それによつて導かれた活動の性質の中に総ての真理又は誤謬があるのである。作用する仮説が真の仮説である。真理は、それらの作用と結果に於いて確認を受ける、現実的な予見され又欲せられた諸ケースの集合に対して

適用された抽象名詞である。」⁽⁵⁵⁾ 以上、問題解決に導いた理論が真理なのであり、それは主体の行動にかかわる観念の性質なのである。その結果、知識は探究の結果として相対性を免れえない。相対的真理の総和によつて絶対的真理に達すると云うのはデューイの立場でなく、彼は何処までもこの相対性を貫くのである。「その一般的意味に於いて知識を定義するものは、連続した探究の輻合的累積的効果である。科学的探究に於いて、解決されたもの又は知識であると考えられているものの基準は、それがより以上の探究に於いて資源として使用されう程に解決されていると云うことであり、より以上の探究に於いて改正に服従しないと云う仕方では解決されていることではない。」⁽⁵⁶⁾ 或いは、「総ての知識は探究の特殊な活動の所産であるので、過誤がないと自証される知識は存在しない。」⁽⁵⁷⁾ とデューイは主張する。かく探究による問題解決の結果としての知識は、連続的な探究に於ける仮説の資源、器具として、変容への契機をもつ相対性に止ると云わねばならない。

最後に、実践の問題に関しても、マルクス主義が、「人間の脳に自然が反映する。人間はこの反映の正しさを己が実践と技術によつて、検証し、適用しつつ客観的真理に到達する。」⁽⁵⁸⁾ 或いは、「行動の結果は、主観的認識に対する検証であり、真に存在する客観性の基準である。」⁽⁵⁹⁾ と云う立場を取るのに対して、デューイにあつては、問題を確定する仮説的理論の検証と場の再構成と云う実験的性格にその焦点をもつのである。即ち仮説的理論は問題解決の方向づけなのであり、それに従つた行動が場の変革を通じて問題の解決の結果した時に、知識と知識の対象が確定される。知識は実験的な探究操作の結果なのであつて、操作的活動は理論が客観的実在を反映しているか又はそれと一致しているかどうかを検証するものではない。その際マルクス主義にあつては、理論が問題を解決するのは、それが客観的実在を反映しそれと一致しているからだとされる。換言すれば、両者にあつては理論が実践によつて検証されると云うこと、これ迄は同一である。だがある対

象に関する我々の理論が実践の検証に耐えうる限り、その理論は客観的実在の近似的反映の証明であるとする立場、それをデューイは却けるのである。理論が不確定的な対象を確定化する行動に導く限り、その理論が真理であるとする立場がとられる。「認識は、それが人間に依存しない客観的な真理を反映した場合にだけ生物学的に有用であり、人間の実践、生命の保存、種の保存に有用であることが出来る。唯物論者にとつては、人間の実践の効果は、我々の観念と我々が知覚する物の客観的本性との照応を証明するものである。」⁽⁶⁰⁾ このレーニンの言葉は、マルクス主義とデューイの真理の性質の相違を明白に物語っている。真理の基準は実践である。しかし客観的実在を反映しているから真理であり、問題解決に導くのではなく、問題解決に導くが故に真理であるとする立場、そこにデューイの特質がある。

5

以上主として認識と知識の問題をめぐつてデューイとマルクス主義の特徴を素描した。自由主義の伝統を固守するデューイの、マルクス主義との対照は、所謂史的唯物論の領域に於いてますます明瞭となる。即ち、階級闘争に対する科学的態度の展開、経済的土台の変革を通じての歴史的法則的發展に対する文化の相互作用としての歴史的発展、革命的实践に対する社会的知性的方法、共産主義に対するラディカルな自由主義、更に本稿に於いて触れることが出来なかつた社会と自然の発展の法則性と云うマルクス主義に対するデューイの説明概念としての因果性についての特色、等々については別途に考察しなければならぬであろう。

引用文献

- (1) Lenin : Aus dem philosophischen Nachlass s. 101
- (2) Ibid. s. 249
- (3) Dewey : Logic (The Theory of Inquiry) p. 287
- (4) Ibid. p. 160
- (5) Marx : Thesen über Feuerbach

- (Reclam) s. 70~73
- (6) Russell : Dewey's New Logic (The Philosophy of John Dewey by Paul Schilpp) p. 143
- (7) Cork : John Dewey and Karl Marx (John Dewey : philosopher of science and freedom : by S. Hook) p. 334
- (8) Wells : Pragmatism-Philosophy of Imperialism- pp. 9-10
- (9) Lenin : Materialismus und Empirio-kritizismus s. 250-251
- (10) Ibid. s. 44
- (11) Ibid. s. 158
- (12) Dewey : Reconstruction in Philosophy p. 43
- (13) Dewey : Quest for Certainty p. 17
- (14) Ibid. p. 29
- (15) Dewey : Reconstruction in Philosophy p. 45
- (16) Dewey : Quest for Certainty p. 124
- (17) Wells : Pragmatism-Philosophy of Imperialism-p. 140
- (18) Ibid. p. 141
- (19) Dewey : Quest for Certainty p. 214
- (20) Ibid. p. 177
- (21) Brameld : Patterns of Educational Philosophy p. 111
- (22) Dewey : Essays in Experimental Logic p. 302
- (23) Cork : John Dewey and Karl Marx (John Dewey : philosopher of science and freedom by S. Hook) p. 339
- (24) Engels : Anti-Dühring s. 41
- (25) Dewey : Experience and Nature p. iii
- (26) Dewey : Quest for Certainty p. 171
- (27) Ibid. p. 103
- (28) Ibid. pp. 86-87
- (29) Ibid. pp. 242-243
- (30) Dewey : Logic (The Theory of Inquiry) p. 8
- (31) Dewey : Quest for Certainty p. 171
- (32) Dewey : Logic (The Theory of Inquiry) p. 159
- (33) Ibid. p. 120
- (34) Dewey : Quest for Certainty pp. 295-296
- (35) 毛沢東 : 実践論 (国民文庫版) p. 18
- (36) " p. 13
- (37) " p. 14
- (38) " p. 27
- (39) " pp. 27-28
- (40) " p. 36
- (41) Dewey : Quest for Certainty pp. 106-107
- (42) Lenin : Aus dem philosophischen Nachlass s. 133
- (43) Dewey : Quest for Certainty p. 83
- (44) Ibid. p. 196
- (45) Ibid. p. 196
- (46) Ibid. p. 200
- (47) Ibid. p. 197
- (48) Ibid. p. 171
- (49) Lenin : Aus dem philosophischen Nachlass s. 89
- (50) Lenin : Materialismus und Empirio-kritizismus s. 99
- (51) Ibid. s. 119
- (52) Lenin : Aus dem philosophischen Nachlass s. 101

デューイとマルクス主義：稲葉

- | | |
|--|--|
| (53) Lenin : Materialismus und
Empiriokritizismus
s. 125-126 | (58) Lenin : Aus dem philosophischen
Nachlass s. 121-122 |
| (54) Ibid : s. 124 | (59) Ibid. s. 141 |
| (55) Dewey: Reconstruction in Philoso-
phy pp. 128-129 | (60) Lenin : Materialismu und Empirio-
kritizismus s. 128-129 |
| (56) Dewey : Logic (The Theory of
Inquiry) p. 9 | (附記, マルクス主義関係の文献の引用ページ
数は, 総て Bücherei des Marxismus-
Leninismus : Dietz Verlag によつた。訳
は大体国民文庫及び広島氏に従つた。) |
| (57) Dewey : Quest for Certainty
p. 193 | |